

『密かに灯り、 巖かに薫る。』

あらたまり澄みきつた来光。どことなく漂う山川草木の薫りを心地好く感じながら、何もかもが静まり、 巖かな空気の中に、密かな灯を見つけられる瞬間が訪れます。

ですが、我に返り、普段に馴染むと、また人里の情けは、時として苦しみや悲しみをもたらします。更に、それを癒やしてくれるのもまた、人のところでしか有りません。

そこで、お大師さまは、京都九条の東寺（教王護国寺）と歌山の高野山（金剛峯寺）を行き来されながら、人里の情も、深山の趣も、大切にされてこられました。

人が救いを求めて仏さまのところに学び。その結果、救いを得た人々の存在が、世間の救いへと広がっていく。この「学びと救い」の完成を目指し、高野山は開創されました。

さて、ここで言う「学び」とは、記憶する事や技術の習得の話をしているのでは有りません。むしろ仏さまのお智慧は、私たちには愚かに感じられ、そのお

言葉は、木訥として聞きにくい中に紛れている様です。

更に、困ったことに、理解出来ない事は、「解らせたくない相手が悪い」と言い、その理由を「難しい」の一言で片付けてしまっただけではありませんか。もったいない限りです。

実は、高野山の「学び」とは、自制心の事を言っています。試験に合格するためでも、資格を取得するためのものでも有りません。精神の高度な制御能力がそのお姿です。

その結果、「貪り」は、求道の志に成り、「怒り」は、正直な行いと成り、「愚痴」は、励まし合う糧と成ります。人は変わらねども、そのまま、仏さまのところに気づくことが出来るのです。

少しだけでも、自分を見つめてみませんか。時間の無駄でしょうか。お釈迦さまは、二千五百年の間、お大師さまは、一千二百年の間、今尚、静かに穏やかに禅定におられます。

平成二十七年修正会

南山 沙門 修詮記